

## 「冷や飯を食べた分だけ強くなり」～隠居のつぶやき

西川武彦

喜多川雅人こと筆者が「冷やす」の兼題で詠んだ標題の句が、当クラブのペン川柳分科会でなぜか秀句の一つに選ばれました。サラリーマン時代に同じような苦吟を味わった仲間たちが、往年を偲んで思わず票を入れてくれたのでしょう。

筆者が勤めた航空会社の本社部門には、当時、次期社長を狙っていた二人の部門長のもとに目立った派閥が二つありました。一つは営業本部。全世界に広がる支店・営業所はその管轄下にあります。圧倒的に多数派です。今一つは経営管理部門です。

筆者は、入社後、羽田国際空港の接客カウンターの現場で鍛え上げられえたあと、一九六四年の東京オリンピックの頃には、門戸開放された日本航空界の本社の営業企画部門に移り、三十代前半からは、国際線の乗り入れ交渉を担当する部門へ配属されました。航空協定はお役所の管轄ですが、下交渉はナショナルキャリアが行なうのが慣行だったのです。

全世界を視野に入れての仕事は夢があり、やりがいもありましたが、したたかな外国社とのやりとりは厳しく、J社でそれを所轄する国際業務部は、担務によっては平均残業時間が月百時間にも上り、「酷際業務部（コクサイゴウムブ）」と揶揄される部門でした。徹夜も稀ではありませんから、厳しい上司のもと、心身の体調を崩す社員も続出、命を絶った先輩もいました。

…というわけで、それを切り抜けた先輩や同輩たちを思い出しながら詠んだのが、この一句です。筆者もその一人で、要領が良かったのか、否、苦行を苦痛に感じないほど「鈍」だったのでしょうか、生き残りました。

筆者が詠んだ別の一句は、「痴話げんか冷やすの忘れて呆け進み」です。お互い様というのでしょうか、つまらぬ口喧嘩も、ぐじゃぐじゃぶつぶつ言い争っているうちに、体力不足・気力喪失で、どうしてもよくなり収まってしまうというオメデタサです。所詮、どうしてもよいことが多いのでしょうか。こちらの方が常日頃の実感がこもっていると、ご隠居はつぶやいています。